〈エッセイ〉

高貴な野蛮人はいない:

ハワイの「王のマント」をめぐる消息

石倉和佳

1. はじめに

イギリスにおける文化的営為に現れた原始主義(Primitivism)とはいかなるものか。この問いは発せられたとたんに行き止まりに到着する。イギリスの文化には、絵画におけるアルカイズムや建築におけるコテージへの回帰など、素朴な形象や意匠への嗜好が様々に見られる」。しかしながら、文明に絶望し新しい芸術表現を求めて、「未開」と言われる人々の工芸や文化に触れ、原始性への思いとともにイギリスの文化シーンに何らかの痕跡を残す仕事をした、といった話は少なくとも19世紀を通してほとんど聞こえてこない。ヨーロッパ世紀末の芸術に現れた原始主義の潮流を思うにつけ、イギリスの場合はそうした芸術思潮の不在の意味を辿るものとなるのではないか、という印象をぬぐえない。それでは何故そうであるのか。本稿は、イギリスにとって最初に「未開の楽園」として目の前に現れた太平洋諸島の島々における経験からは、原始性への回帰を志向し賛美する動機が生み出されえなかったことについて、ハワイの事例から考察を加えるものである。

2. オーストラリアとハワイー高貴な野蛮人はいない

18 世紀以降のイギリスにおける海洋探検の歴史は、太平洋の島々の「発見」とそれに続く太平洋諸島の社会の変化の歴史とパラレルになっている。太平洋の島々の暮らしは、ヨーロッパの国々から見て、素朴で文明に染まっていないものに映ったはずであるが、イギリスにとって島々の「発見」は決して楽園の発見とはならなかった。ジェイムズ・クックが第1回航海に出た1768年には、太平洋には、スペイン、オランダ、フランスなどがすでに存在を確認している島々が多くあったが、クックの探検と調査によりそれまでよりもより正確に地理的情報が記録されることになった。ニュージー

ランドやオーストラリア東部は、クック隊による測量によってこのときはじめて海岸線が明確になった。オーストラリアは 1770 年のクックによる領有宣言に続き、1788 年には東部ニュー・サウス・ウェールズ沿岸に流刑植民地(penal colony)が作られ、移民者とともに多くの罪人が送られるようになる。イギリスの人々にとって、オーストラリアへ「未開の地」としてのあこがれを抱く暇もなく、多くの人々が流人兼労働者として護送されるようになったのである。その後オーストラリア全土はイギリスの植民地となり、アボリジニへの迫害が続くこととなる。

クックが「発見」した島々として最も重要なものはハワイ諸島である。1778年のクック来訪以前には、西洋人との接触がなかったと考えられるハワイでは、諸島の人口増加が続いていたと考えられ、灌漑技術が発達し大規模耕作が行われ、社会構造も階層的なものとなっていた。クック隊と島々の住人達の交流は、悲劇的なその後のハワイ社会への引きがねとなったものであった。クックの来訪から1年もたたないうちに島々には性病がまん延し、その後の引き続く各種の疫病の始まりとなった。ハワイの先住民と考えられる人々の数は、クック来訪後1世紀で10分の1ほどに減少した²。ハワイの人々の作り出す装飾品や弓矢などの実用・工芸品に、クック隊の船員たちは目をとめたはずである。しかし19世紀の末、ヨーロッパで原始芸術への興味が強くなったときには、すでにクックの時代に生きたハワイの先住民の人々はほとんど現存せず、芸術品と呼んでもよい工芸品の数々も、それらを作る知恵や材料がすでに失われていた。ハワイの人々は民族が生み出した美を語る言葉をほとんど持たないままそれを失ったともいえる。

文明から遠く離れた「未開」の地に暮らす人々に人間の汚れない姿を見て、そこに本来の人間性を見出すといった西洋人の感性の表現は、「高貴な野蛮人」('noble savage')にまつわるディスコースとして言及される。イギリスにとってこうしたディスコースが可能になる対象は、太平洋諸島の島々であったはずである。しかし、オーストラリアやニュージーランドおよび近隣の島々、そしてハワイ諸島に関して、イギリスにおける主な関心は工芸や美術に関したものではなく、ましてや原始性への賛美でもなかった。オーストラリアやハワイの先住民の人々(アボリジニ)の工芸品が持ち帰られ、書物や美術館で紹介されたが、それらの芸術性に目を向けられることは少なかった。太平洋の島々についての情報は、イギリス海軍による海洋調査の成果であり、そこに

はイギリスの海洋航海技術の優越性が示されているものであった。オーストラリアに対しては領土的関心から流刑地としての利用が実現し、ハワイに関しては毛皮や鯨を求める捕獲船の寄港地として地勢上の利用価値があった。

しかし、太平洋の島々が決して楽園ではなかったということは、多義的な意味を含む。楽園ではない、という認識は現実的なものでもあるからである。原始主義にふける人々は通常文明の側にいることに疑いを持たず、しばしば「未開」な人々の現実を見ないからである。自分たちが失ってしまったと感じるものを、他者である「未開」の人々の中に見出すことは、他者のイメージによる自己補完の行為であり、そこでは「未開」であることのリアリティは消去され、原始性や純粋性へとすり替わってしまう。西洋文明は自分たちの優越性を保持したまま、自分たちの目の前に現れた他者なる「未開人」たちを自分の欲する表象の中に閉じ込める。キリスト教布教のため各地にとどまった人々の中にもこうした心的歪曲が見られる。多くの場合、キリスト教を信じない人々に悪魔を見ようとするのであるが。

以下には、ハワイの王たちからイギリス側へ送られた「王のマント」を取り上げて考察したい。「王のマント」はハワイの支配者たちがイギリス海軍の人々に送ったものの中で最も象徴的かつ政治的意味を持つものである。

3.1 三つの「王のマント」

ハワイ王朝の宝物としてしばしば言及される「王のマント」(The Royal Cloak, or feathered cloaks, 'ahu 'ula)は、何十万もの鳥の羽を編地に編込んだもので、もっとも壮麗なものは床まで届く長さを持つ。王族、もしくは部族の長など権力者のみが特別な場面で身につけるものである。このマントを纏うことで悪魔をよけ統治の力が与えられると考えられた。代表的なデザインとして、黄金に近い黄色地に赤で幾何学的な模様が描れているものがあり、他にはすべて黄色のもの、黒や茶色の色が使われているものがある。これにはムネフサハワイミツスイ(Hawai'i 'ō'ō, Moho nobilis, 図 1)やキゴシクロハワイミツスイ(Hawai'i Mamo, Drepanis pacifica)と呼ばれるハワイ原生種の鳥の黄色い羽根が多く使われたと言われている。これらの鳥は 20 世紀に入って、生息地の消滅や乱獲のため絶滅した。ちなみにハワイの植物相および動物相は、ヨーロッパ人が家畜や様々な植物を持ち込んだことで大きく変化したと考えられてお

り、多数の生物が絶滅している。「王のマント」は現在各地に保存されているが、その 詳しい所有リストなどがないため、どの程度現存しているかの詳細な記録はない。大 英博物館にもいくつか所蔵されているが、所蔵されるようになった経緯が十分に明確 でないものも含まれている。これらのマントがもたらされた当初、デザインや使われた 鳥の種類などについて、詳細に記録されなかった場合が多く、クック航海の遺品とし ての価値のみが強調されたためかとも推測できる³。次には、歴史的に重要な三つの 「王のマント」とそれらの関連事項を紹介する。

3.2 ハワイ王カラニオプウ(Kalaniopuu) からキャプテン・クックへ

最初に取り上げるのは、1779 年にクックがハワイ王から直接手渡されたもので、デザインとしては写真 1 の大英博物館所蔵のものと同類である。赤の地に黄色の縁取りと幾何学的な模様が付けられている。このマントは 20 世紀初頭から長くニュージーランドの博物館に所蔵されていたものであるが、2016 年にハワイ州へ返還されたことで話題になった4。キング海尉(James King, 1750-1784)の 1799 年 1 月 26 日の日誌には、ケアラケクア湾に停泊している時に村から食料が大量に持ち込まれ、ハワイ島の王がクックを訪問した際に渡されたものである。その時、クックと対面した王の行動について、キング海尉の日誌には次のように書かれている。

王は立ち上がりとても優美な所作で船長の方に彼自身が身に付けていたマントを 投げかけた。そして頭に鳥の羽の帽子をかぶせ、とても巧妙に作られた虫追いの はたきを持たせた。それに加えて、王は船長の足元に、非常に美しく彼らにとって 最も価値のある5枚か6枚のマントをさらに広げた。

... the King got up & threw in a graceful manner over the Captain's Shoulders the Cloak he himself wore, & put a feathered Cap upon his head, & a very handsome fly flap in his hand: besides which he laid down at the Captains feet 5 or 6 Cloaks more, all very beaufirul, & to them of the greatest Value...⁵

ここに描かれている何枚ものマントがすべてクックとその部下たちに与えられたものなのかどうかは分からない。とはいえ最も豪華な 1 枚は、王が自らのマントをクックに

与えたカラニオプウのマントとして、イギリスで展示されることになる。詳細な経緯は不明であるが、クック隊が帰国したのち、収集家のアシュトン・レーバー(Ashton Lever, 1729-1788)の博物館に収納され、別のマントと一緒に展示された。

このマントはレーバーの博物館の中ではハワイのコーナーの目玉であったらしく、 1806 年の目録には詳しい説明が掲載されている。その中に、次の記述がある。ここでは、鳥の羽でできたマントを個別に識別することなく、ハワイの首長たちが身に付けていた場面が記述されている。

これらの鳥の羽のマントはとても希少なもので、男性のみ身に付けるものであり特別な場合にのみ使われる。というのも、これらのマントを身に付けているのが見られたのは三度しかなく、ハワイ王とその臣下たちが最初に船に乗って現れ前に進んできたとき、二度目はハワイの人々の誤解による憤慨によってクック船長が命を落とした暴動のとき、そして三度目は、主要な首長たちのうちの二人が、この不運な船長の骨をクラーク船長まで持ってきたときである。

These feathered cloaks which are very scarce, are appopriated to the men, and worn by them on very particular occations only; as they never were observed to appear in them more than three times, namely, in the procession of the King of Owhyhee and his people to the ships on their first arrival; next in the tumult, when Capt. Cook fell a victim to their mistaken resentment; and the third time, when two of the principal chiefs brought this unfortunate commander's bones to Capt. Cleark.⁶

鳥の羽でできたマントを身に付けるのは首長や王のみであり、そのマントの大きさで 社会的な位が決まっていたようである。クックは少なくともハワイ諸島の王たちと同等 の地位を認められたことになるだろうか。公式のクック航海記(1784)には、クックはこ のマントのお礼に綿のシャツを贈ったと書かれている⁷。

レーバーの博物館は 1783 年には財政的に維持が困難になり、1786 年に収集品の全てがくじの景品としてジェイムズ・パーキンソン (1730-1813) に委譲された。続くナポレオン戦争の時代には、パーキンソンの博物館も経済的に困難な状態になり、1806 年には博物館の全ての収集品がオークションに出されることになる。このマント

は博物学者で博物館を所有していたウィリアム・バロック(William Bullock)が購入した。バロックは後年、博物館の所蔵品を大英博物館に買い取ってもらい、その資金で他の展示事業を試みようとした。しかし大英博物館が拒絶したため、所蔵品は再度オークションに出されることになった。このマントを買い取ったのは、貴族のウィン家(the Winn family)の一人、チャールズ・ウィン(Charles Winn)であった。その後ウィン家に 100 年以上保管されていたが、1912 年、当主であったオズワルド卿(Lord St. Oswald, Rowland Winn)は、当時のニュージーランド自治領にあった博物館(the Dominion Museum in New Zealand)にマントを寄贈した8。

3.3 カメハメハからジョージ3世へ

ジョージ・バンクーバー(George Vancouver, 1757-1798)は、クックの世界一周航海に二度同行し、自らも北西航路の調査に太平洋航海を行った。航海の途上、冬越しのためにハワイに三度立ち寄り(1791-94)、船長のバンクーバーと当時ハワイ島の王であり最も勢力のあったカメハメハは交流を深めた9。ここでは、バンクーバーとカメハメハにちなむ王のマントについて紹介する。

クック隊は合計 30 枚ほどのマントを持って帰ったと言われているが、それに比して バンクーバーの探検隊はカメハメハとその臣下たちと親しく交流したにもかかわらず それほどの数を持って帰ったという記録はない。これはバンクーバーが船に装備さ れた鉄器や銃器はすべてジョージ 3 世がタブーを布いていると説明し、イギリス国王 が派遣した船であることを強調していたことも影響していると考えられる。クックの訪 問時は、ハワイ諸島には複数の王がおり首長も多くいるなかで、イギリス海軍の人々 にもマントが送られた。バンクーバーの訪問時には、カメハメハが全島統一を目指し ている途上であった。カメハメハは直接バンクーバーにマントを送ることをせず、最後 に出発する際に別途マントを進呈するので、それをジョージ 3 世に献上してもらいた いと公言している。ハワイ王からイギリス王への進物である。

献上されたものは、バンクーバーと初めて謁見したときにカメハメハ自身が身につけていた黄金色に輝く黄色のマントであった。その時、10艘のカヌーが 5艘ずつ対になって海上でハの字を作る間を、最も大きな 1艘の船が進み、そこにカメハメハが立っていた。その様子をバンクーバーは次のように記述している。

最も大きなカヌーはそれぞれの側にある18のオールで漕がれており、クック船長がカラニオプウに送った柄のあるリネンのガウンをまとったハワイ王がその中にいた。私が見た中で最も素晴らしい、ほとんどが美しく輝く黄色の鳥の羽で出来たマントを身につけ、それは王の肩から足元に巻き付くように伸びていた。彼は頭にとても立派な帽子をかぶり、すべてが壮麗な様子であった。

The largest canoe . . . was rowed by eighteen paddles on each side; in this was his Owhyhean majesty, dressed in a printed linen gown, that Captain Cook had given to Terreoboo [Kalaniopuu]; and the most elegant feathered cloak I had yet seen, composed principally of beautiful bright yellow feathers, and reaching from his shoulders to the ground on which it trailed. On his head he wore a very handsome helment, and made altogether a very magnificent appearance.¹⁰

カメハメハはこのマントを送るにあたって、ジョージ 3 世の手に渡るまで、決して誰もマントを肩にかけることをしないようにと念をおしたそうである¹¹。

もう1 枚のマントは、バンクーバーがハワイを後にした1794 年から16 年後、カメハメハがジョージ3 世への手紙をデューク・オブ・ポートランド号(Duke of Portland) に 託して送った際に添えられた進物の一つであったものである。カメハメハはこの時、ポートランド号の船長に書簡を書きとらせたという。1810 年3月3日の日付のある書簡の冒頭は以下の通りである。

バンクーバー船長がここを去って以来、陛下に書簡を送る機会がなくご無沙汰となってしまいました。バンクーバー船長は陛下が私に小型船を送ってくださると言ったのですが、残念ながら一つも受け取っておりません。あなたの国が多くの強国と戦っているのを聞いて残念ですが、とても遠いところにいるのであなたを助けることもできません。もし陛下が戦っている国が私を悩ませることがあれば、陛下が守ってくださることを期待いたします。陛下の戦艦や私掠船が我々の港に停泊するどの船も捕縛することがないように命令していただきたく思います。陛下のおかげで私たちの港は中立港ですの

で、防衛の手段を持ちません。

Having had no good opportunity of writing to you since Capt. Vancouver left here has been the means of my Silence. Capt. Vancouver Informed me you would send me a small vessel am sorry to say I have not yet received one. Am sorry to hear your being at War with so many powers and I so far off cannot assist you. Should any of the powers which you are at War with molest me I shall expect your protection, and beg you will order your Ships of War & Privateers not to Capture any vessel whilst laying at Anchor in our Harbours, as I would thank you to make ours a neutral port as I have not the means of defence. 12

カメハメハはこのほかに、ヨーロッパ人からの攻撃に備えて鉄砲が必要であること、 農作物や毛皮を交易するための勅許が欲しいことを述べている。また、戦闘の中で2 名のイギリス人の船長が死んだことについて付記している。

カメハメハの書簡では、ハワイ王とイギリス王との何等かの同盟関係が示唆されているが、イギリス側が同様に考えたとは推測しにくい。イギリスには 1812 年にこの書簡が届き、体調を崩していたジョージ 3 世の代わりに、摂政皇太子(のちのジョージ 4 世)が進物を受け取り兵器庫に保管したと伝わっている¹³。リバプール卿がカメハメハに当てて、ハワイ諸島の交易船には危害を加えない事や、ヨーロッパでの戦争では善戦していること、そしてイギリス人がハワイ諸島を訪問した場合は助けてやってほしいということを伝えた書簡が残っている。カメハメハの望んだ武器や勅許は送られることがなかった。

4. おわりに

王のマントはハワイの工芸品のなかで最も優美で価値のあるものといえる。鉱物資源に乏しいハワイでは、美しく輝くものを自然の生き物から得ようとした。クック隊はマントの製作に使う羽を得るために鳥を捕獲しに行くカヌーに乗った人々と遭遇している¹⁴。その頃は、ハワイ各島の首長達の争いが激しくなっていた時期と考えられるが、首長達は自らの権威を誇示するために、より美しい鳥の羽を求めマントを作らせてい

たのだろうか。バンクーバーと初対面した際のカメハメハも、大きなカヌーに乗り黄金 色に輝くマントに身を包み現れた。いまだハワイ統一はなされていなかったが、自ら が王であると誇示するパフォーマンスとすれば効果は絶大であった。

王のマントにまつわるイギリス海軍や関連する人々の記録から伝わってくるものは、それが極めて政治的な道具であったことである。王のマントが現れる場面では、権力者は自らを明示し、そのマントの譲渡は政治的対話を意味した。そこには「高貴な野蛮人」への夢が入り込む隙はない。とはいえ、カメハメハが後年ロシア人画家の前に座って肖像画を制作したとき、ハワイ伝統の衣装を着てほしいとリクエストされたが固辞し、しばらく待ってくれと頼んでイギリスの船員の着るシャツと赤いベストに着替えたという話が残っている(図 2)¹⁵。カメハメハは、王のマントが役に立つ時には利用するが、他の衣装がよいと思えば船員の服でも身につける。アメリカ西岸から中国へと太平洋を往復する商船が増加する中、この肖像画は評判になり貿易港であったマニラで多くの複製が作られて売られるようになった。このとき、彼が対峙していたのはハワイ諸島を貿易の中継地として訪れるヨーロッパの人々であり、彼が身に付けたものはそうした人々とのコミュニケーションを図る視覚的意匠であった。

-

¹ ウィリアム・ブレイク(William Blake, 1757-1827)や、ブレイクに影響をうけたパーマー(Samuel Palmer, 1805-1881)の絵画には一種のアルカイズムが見られるが、彼らの古代のヴィジョンの源流はあくまでもヨーロッパである。また、イギリスに古くからあるコテージの建築意匠に対する関心は、18 世紀後半のピクチャレスクの流行とともに始まったと考えられるが、農耕や牧畜とともにある農村風景へのノスタルジアと共に「絵になる」景観要素を求める態度が基本となっている。
2 18 世紀末のハワイ諸島の実情、およびその後の人口減については、拙稿「18 世紀末から 19世紀初頭のハワイ諸島における病と死—ハワイはいかに語られたか—」『兵庫県立大学研究報告』第24号(2022年3月発行予定)に詳しい。

³ ウィリアム・バロック (William Bullock, c.1773-1849) はロンドンに博物館を構え、そこにはクック 航海によって持ち帰られたといわれるハワイの品々が展示されていたが、それらが実際にすべてクックの航海と関係のあるものなのかについては、疑問がだされている。A. L. Kaeppler, "Cook Voyage Provenance of the 'Artificial Curiosities' of Bullock's Museum," *Man* (NS) 9 (1974): 68-92 参照。

⁴ Robbie Dingeman, "For the First Time in 237 Years, A Hawaiian Chief's Royal Treatures Return Home," May 11, 2116, *Honolulu Magazine*. https://www.honolulumagazine.com/for-the-first-time-in-237-years-a-hawaiian-chiefs-royal-treasures-return-home/ (20211222) および "The Return of the Royal Cloak & Helmet of Kalaniopuu" Office of Hawaiian Affairs (c.2016) https://vimeo.com/189245734 (20211222)に詳細がある。

- Cook, James. The Journals of Captain James Cook: The Voyage of the Resolution and Discovery 1776-1780. Vol.3. part 1, ed. Beaglehole, J. C. (Cambridge: Cambridge University Press, 1967), 512.
 A Companion to the Museum, Late Sir Ashton Lever's. (London, 1790),19.
- 7 後述の注 10 の引用箇所に出てくるカメハメハの着ているガウンが、この時送られたリネンの着物 (a linen shirt) であると分かる。 "Captain Cook, in return for the feathered cloak, put a linen shirt on the king [Terreeoboo] and girt his own hanger round him," (James Cook and James King, A Voyage to the Pacific Ocean, vol.3, London, 1784), 18.
- 8 これらの経緯は、ニュージーランド博物館(Museum of New Zealand, Te Papa Tongarewa)にあるオズワルド卿からの寄贈物とともに説明されている。鳥の羽でできた何枚もの首長たちのマントは、クック隊の隊員たちに強い印象を与えたということである。

https://collections.tepapa.govt.nz/topic/1120 (20211222)

- 9 バンクーバーの航海については、拙稿「忘却と追憶:ジョージ・バンクーバーの太平洋航海」 『カルチュラル・グリーン』 第2号、1-20参照。
- ¹⁰ George Vancouver, The Voyage of George Vancouver 1791-1795, vol.3, ed. W. Kaye Lamb. (London: Hakluvt Society, 1984), 811.
- 11 これはバンクーバーに同行した博物学者で医師であったメンジーズ(Archibald Menzies, 1754-1842) の記録にある。マントにはタブーが布かれており、ハワイ諸島で最も上質のものだとカメハメハは説明した。George Vancouver, *The Voyage*, vol3. 811n 参照。なお、このマントが現在どこにあるのか正確なところは不明である。
- 12 カメハメハからジョージ 3 世への書簡については、Rhoda E. A. Hackler, "Alliance or Cession? Missing Letter from Kamehameha I to King George III of England Casts Light on 1794 Agreement," *Hawaiian Journal of History*, 20 (1986), 1-12 に詳しい。カメハメハの書簡は同年の 8 月に別なものが作られているが、本稿では最初の書簡のみ取り上げている。
- 13 このマントは現在、王家の収集品を管理しているトラスト(Royal Collection Trust)の所蔵となっており、マントの写真とともに若干の説明が加えられている。写真で見る限りマントはかなり傷んでおり、輸送もしくは保存の段階で傷んだものかと考えられる。https://www.rct.uk/collection/69996/cloak-ahuula (20211222)参照。
- 14 James Cook and James King, A Voyage to the Pacific Ocean, vol.3, London, 1784, 172 参照。
- 15 Boston Atheaeum HP 参照。https://www.bostonathenaeum.org/about/publications/selections-acquired-tastes/kamehameha-great-king-sandwich-islands-ca-1816 (20220226)



図 1 ムネフサハワイミツスイ (Male and female Moho nobilis – Hawaiʻi ʻō ʻō) by John Gerrard Keulemans) [PD-US]



図 2 ロシア人の Ludwig Choris によって描かれた 1816 年頃のカメハメハの肖像の写し Otto von Kotzebue, *A Voyage of Discovery in the Years 1815-1818*, vol. 1 (London, 1821), front page にある。



写真 1 大英博物館に所蔵されている王のマントの一つ。クック第 3 回航海の際に持ち帰られたと伝わる。クックの死後船長となったキャプテン・クラークに与えられたものか。

British Museum (Museum number Oc, HAW.133)

https://www.britishmuseum.org/collection/object/E_Oc-HAW-133 (20211223)